

まずは年間2試合のPDGAメジャーに参加させて頂けたこと、私が参加するに辺り、多大なるご支援、サポートをして下さったHero Disc様、協会関係者様、応援して下さいました皆様に心より感謝申し上げます。

今回このレポートのお話をいただいたときに、何を書くのが一番良いのか正直迷いました。

私なりに考えた結果、遠征記やアメリカやヨーロッパで何をやっていたのか等の海外レポートを書いても意味がないという結論に至りました。

PDGAメジャーの2大会に参加させて頂くことができた意味を自分なりに受け止め、そして、今後世界に挑戦しようとする選手達に1つでも役に立てばと思い、「今の日本人に何が足りていないか」「日本人が世界を目指すためにどうすれば良いのか」という部分を、ヨーロッパとUSDGCの経験から私なりに書きたいと思います。

・ 飛距離について

今回の海外遠征で大きく感じたこととして、自分の圧倒的な飛距離の足りなさを痛感しました。

USDGC、ヨーロッパオープン共にタイトにOBが切られ、飛距離以上にシビアなコントロールが必要とされるのですが、それでも飛距離の足り無さを感じました。冷静に判断して、USDGCでは170人中良くて100番くらいの飛距離であったと思います。ヨーロッパではもっと大きな飛距離の差を感じました。

それと共に、海外の選手は長いコースに投げ慣れているということを強く感じました。

試合の中で飛距離を出す技術を持っている、具体的にはディスクを起こす技術が高いということです。

スピードもさることながら、高さを使ってディスクをターンさせることが非常に上手でした。細かい技術やスコアはこちらの方が良くても、海外の選手のディスクを起こす技術、飛距離を出す技術は目を見張るものがあります。

・ パットの距離について

「パット」の距離の認識の違いはとても大きいです。

例えば5mの距離、ヘビーディスクではゴールに手を出すだけで、あとはディスクの重さでバスケットまで飛んでくれます。

150 classでは回転をしっかりかけることや、重さを使うことが難しい分左右にも上下にもブレが生まれます。短い距離も150 classではよりシビアに、ナーバスになってきます。

150とヘビーではパットに対する適正距離が違うということです。

ただし、ひとつ勘違いしないでもらいたいことは、ヘビー>150という訳ではありません。現在の日本の狭く短いコースでは、ゲーム性を高めるには150 classのディスクを使用した方が有効だと思いますし、ゲーム感も高まり、よりシビアな試合になることも確

かだと思えます。

適材適所、それに「適時」が加わったときに、日本でもヘビーディスクが投げられるの
かもしれません。

さて、上記のことを踏まえた上でパットの距離の認識の違いについてです。

例えば90m par 3での20mパットと、350m par 5での20mパットの意識
の違いです。

日本の公式戦は大体コースの平均距離が90m程度です。そのコースで70mのショッ
トをし、パットの距離が20m残ると、そのパットは「ああ、こんなに長いパットが残っ
たよ」となります。つまりその20mをパットとして認識せずに、ミスショットの延長の
なんとなく寄せるためのものになってしまいます。

しかし、USDGCの5番や13番、ヨーロッパの14番などの300mを超えてくるコ
ースでは、残り20mは絶対にねじ込みたいという認識になります。

この「意識」の差がそのままパットの距離の差、世界に出たときのスコアの差につながり
ます。

20mは入らないにしても、15m、13m、11m、この辺になると世界のトップと
の差が確実に生まれます。

頭で理解しても体が理解しないとこの差は埋まりません。

上意識でやっていることを下意識(無意識)で行えるまでに昇華させなければならない。

これは大変な努力が必要なことですし、大きな問題だと感じました。

・メンタルについて

国際メジャーのコースは基本レイアウトが変わりません。そのため、参加回数が多けれ
ば多だけ新しい発見があることが分かりました。

同じコースのティーに立っても、初参加と2回目の参加では見える景色が違うし、新し
いラインが見えたり、前回の挑戦では出来なかった試みが出来たり、自分の成長を感じさ
せてくれたりします。自分の成長が分かるだけでも複数回参加することは大きな意味があ
り、財産になると思います。

試合中のメンタルでは、流れが良いときにはあまり気にならないのですが、流れが悪く
なってくるとコースが異常に狭く感じられます。OBがあればタイトに切られている訳
ですから、戦略のない攻め、適当な攻め方では100%失敗します。

流れが悪くなったり、後手後手に回ってしまうと、一気にラインが狭まりOBにディス
クが吸い込まれていきます。

自分の引き出しを増やし、選択肢を増やすことによってそうなったときに最小リスクで
済ませられる手段を身に付けなくてはならないと強く感じました。

・それでは日本人は何が勝っているか

私自身、幸いにも昨年からメジャーに参加させて頂ける機会が増えたので、海外の大きな大会に出てくる選手達と交流する機会を多くもつことができました。

その中で海外の選手達と比べても、私を含め日本人は試合前に冷静に集中力を高められる力があるということが分かりました。

試合前の準備、アップは非常に大切です。この時間の使い方で試合のパフォーマンスは大きく左右します。

しかし、海外の選手はこの時間をあまり有効に使っているとは思えません。なんとなく投げている人が多く思います。

この時間をシステムティックに、クレバーに使えることが日本人の大きなアドバンテージだと感じました。

それに伴い、試合中で緊張する場面でもクレバーな選択ができるということに気がつきました。

外人選手は感情的になる選手が多く、精神的なムラがある選手が多いです。(もちろんトップ選手は自己コントロールが出来ています)

その中で日本人選手は冷静さを保てる力をもっていると感じました。

・ 最後に

こうしてレポートを書きながらやはり強く思うことは、長い距離を投げられる環境が必要だということです。

日本は土地の問題でロングの距離を投げられる環境を作るのが非常に難しいのも事実です。

しかし、この辺の問題を解決していかないと世界で勝つには難しいと思いました。河川敷でもなんでも見つけて長い距離を投げられる環境を捻出しないといけませんね。

ゲーム感、細かい技術では日本人は海外選手に負けていません。

アプローチの精度などで言えば世界のトップと十分に張り合えるだけのスキルがあると思います。

今はワールドスタンダードの時代です。

私が6年間しかないディスクキャリアでここまで来ることができたのも、海外での経験や国際舞台がすべてと言っても過言でない位の大きな財産になっています。(2002年JO。2004年JO。2006年、JO、8月LA合宿、ヨーロピアンオープン。2007年、ヨーロピアンオープン、USDGC)

海外での経験は視野を広げ、自分の可能性を伸ばしてくれます。

世界視野でプレーできる選手が一人でも多く増えれば、日本のディスクゴルフのレベルもどんどん世界に近づいて行くと思います。

最後までレポートを読んで下さった方、駄文で恐縮でしたが、最後までお付き合い頂き有り難うございました。

私の経験が少しでも皆様の今後につながれば嬉しいと思い、今回のレポートを書かせて頂きました。

生意気なことを書きましたが、私もまだまだ成長過程のプレイヤーです。

もっともっと強くなり、応援して下さいる皆様に恩返ししたいと思います。

私を支えて下さっている皆様、応援して下さいるすべての方に心より感謝申し上げます。有り難うございました。

これで今回のレポートを終わりたいと思います。

J P D G A # 2 0 0 2

P D G A # 8 1 4 5

菊地 哲也